

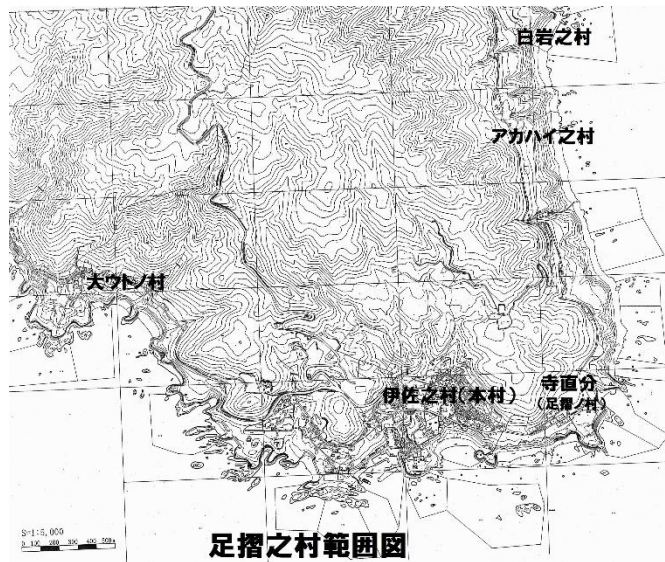
## 『長宗我部地検帳』の「足摺之村地検帳」から 見えてくる中世・足摺之村の様相

『長宗我部地検帳』(以下『地検帳』と記す)は、これまで数多くの方々により、その研究が積み重ねられてきた。土佐史談会の研究誌『土佐史談』には、これに関わる多くの論文が集積されている。しかし、『地検帳』の天正17年11月7日『土佐国幡多庄足摺之村地検帳』を直接主題にした研究は、浜田数義(1994年)の研究の他は見当たらない。今号では、中世・足摺之村の『地検帳』から読み取ることができる足摺岬一帯の様相について考察していきたい。

### (1)『地検帳』の中世・足摺之村の範囲

『地検帳』から読み取ると、白岩之村・アカハイ之村・切詰之村・寺直分(足摺ノ村)・大ウトノ村が、中世「足摺之村」の範囲である。

白岩之村とアカハイ之村は、大谷地区から南部一帯の現在の赤瀬周辺を指していると思われる。切詰之村は、赤瀬と足摺岬の境界付近一帯を指している。足摺地区住民は、昔から切詰之村南部の磯を「切詰ノ浜」と呼び、時季にテングサや貝採りに行っていた。私も友だちと小学生時代にトコブシを採りに行ったことが今は懐かしい思い出である。



足摺之村西端は、大ウト之村である。この村は、現在の大戸地区であろう。サニーサイドホテルの東側がその境界と思われる(通称「スポノロ」と大戸が境)。

以上、足摺之村は伊佐之村を本村とし、白岩之村・アカハイ之村・切詰之村・寺直分(足摺ノ村)・大ウト之村等の枝村からなり構成されていた。

### (2)16世紀後半の本村・伊佐之村の様相

伊佐之村には、4人の水主(又衛門・藤三良・吉衛門・彦四郎)の給地が散見される。4人とも村内に1～2反(※1反=約300坪)の給地があり、松尾之村の8人の水主とともに金剛福寺よりかなり優遇されている。今後、さらなる研究を深めていく必要はあるが、現時点で中世・金剛福寺が関わる土佐湾岸航路の海運と何らかの役割を担っていたのではないかとと思われる。土佐一条氏との関係も興味深い。

また、寺直分に弓場屋敷・岡崎屋敷が、伊佐之村に山口屋敷・マンチュウ屋敷・クタシ屋敷・中屋敷・大工屋敷・鍛冶屋屋敷が『地検帳』に記載されている。岡崎屋敷・山口屋敷・マンチュウ屋敷・クタシ屋敷・中屋敷は、それぞれ岡崎左馬進・北代市大夫・北代忠兵衛・千頭飛驒守・鳥屋弥三兵衛が居住・生活し、彼らは恐らく金剛福寺の寺侍とみられる。弓場ヤシキは、寺侍が日常的に武芸を修練していた住居兼道場的な建物だろう。

大工屋敷・鍛冶屋屋敷は、それぞれ大工・北代近江・鍛冶屋・山崎助進のヤシキであり、彼らは金剛福寺やその傘下寺院の建物建築や管理修繕、金物の鑄造等に関わっていたのではないだろうか。

### (3)まとめ

土佐一条氏支配下の高知県西部で幡多荘を中心に 3,000 石を領有した金剛福寺は長宗我部氏支配下で 2,000 石を切り、近世になり寺領を僅か 100 石に削減された。『地検帳』をよく見ると、白岩之村・アカハイ之村・切詰之村（現在の赤磐から足摺岬東部にかけて）において、金剛福寺の中間（雑務に従事した人々）を使い耕地開墾と農耕を積極的に進めている様子がうかがえる。

紙面の関係から詳細に記述することが難しいため、7月に発行される『土佐史談第280号』に投稿して詳細に論述する予定であり、今回は以上の概要に留め置く。

### 【編集後記】



↑窪津崎の県道脇に咲く「あやめ」 撮影：市史編さん室・田村公利

土日を利用して天気の良い日は、窪津崎を権現までウォーキングをしています。窪津崎の県道脇の花壇に地元の老人クラブが植えたと思われる四季時期の花が私たちを楽しませてくれています。花を植える人の気持ちが、それを見る者の心に写り、優しい気持ちとなり、心が満たされる気がします。

これは「菖蒲？」それとも「燕子花？」。素朴な疑問が沸き上がりました。インターネットの画像検索で調べても判然としません。そこで国立公園\*ジオパーク推進課森口専門員に連絡し、判定してもらうことにしました。森口専門員、お忙しいところをすみません。答えは、「あやめ」だそうです。（田村）